

比叡山延暦寺の近世・近代における伽藍の新陳代謝

はじめに 奈良文化財研究所では2011年度から2ヵ年にわたり、比叡山延暦寺の全山建造物調査をおこなった。その結果、織田信長の焼き討ちからの具体的な復興や近代における造営の様子が一部、あきらかとなった。これらの要素は現在の延暦寺の伽藍に大きな影響を与えていた。詳細は既刊の『比叡山延暦寺建造物総合調査報告書』（比叡山延暦寺、2013）を参照されたい。

三 塔 延暦寺は東塔・西塔・横川の三塔と二別所（黒谷・安楽谷）によって形成される。東塔が延暦寺全体の中心であるが、三塔はそれぞれ中堂を有し、各伽藍は一定の広さを有する。これの三塔の建物を対象に、焼き討ち以降の造営と修理を通して、延暦寺の近世・近代の伽藍の新陳代謝について言及したい。

時期区分 延暦寺の建築を語るうえで、元亀2年（1571）の信長による焼き討ちが画期である。この焼き討ちは延暦寺における中世までの造営の終焉であると同時に、その復興は近世の造営の幕開けであった。この復興を契機とみると、江戸時代から戦前を以下の5時期に分けることができる（表3）。現存遺構と対照させつつ、この時期区分について順に述べよう。

I期：近世第一次復興期（元亀～寛永11年） 焼き討ち以降、信長の存命中には延暦寺の再興はなされず、信長の死後、豊臣家と徳川家によって、復興が徐々に進んだ。

この復興により、西塔・横川では主要建物の多くが再建され、以前の姿を取り戻しつつあった。しかし東塔には根本中堂や戒壇院の仮堂が建てられた程度で、本格的な復興は徳川家光と天海の助力を待たねばならなかった。

これらの再興した堂舎も寛永8年（1631）の暴風によって、根本中堂・講堂・戒壇院・文殊楼・常行堂・法華堂・四季講堂など、三塔の主要な建物は倒壊した。

II期：近世第二次復興期（寛永11年～延宝年間） この時期は徳川家光と天海による東塔の復興が主たるものである。寛永8年の暴風による被害は甚大で、横川中堂・常行堂・法華堂・瑠璃堂など、ごく一部の建物が被害を免れたにすぎず、焼き討ち以降の再興が水泡に帰した。この状況を憂慮した天海は將軍に諸堂の再建を要請し、寛永11年（1634）の徳川家光の上洛にともなって、この願

いは聞き届けられた。そして寛永19年（1642）には、根本中堂・大講堂・文殊楼などの東塔の主要な堂舎が、幕府の力で再建された（御用作事）。これらの御用作事により、東塔の復興が名実ともに開始したのである。

II期の造営は東塔の主要建物に集中している。特に徳川家光と天海による根本中堂などの寛永期の造営から浄土院（最澄の霊廟）・戒壇院の造営は、一連の御用作事による東塔復興であり、現在の伽藍の主要な堂舎の多くがこの時期までに築かれた。すなわち戒壇院の完成は、東塔のみならず、I期に整備された西塔・横川とともに三塔全体の伽藍が復興したこと、言い換えれば近世延暦寺の伽藍の基本的な構成が完成したことを意味するのである。

III期：維持管理体制の確立期（天和～18世紀） 主要建物の整備が完了したIII期には、造営の対象は周辺建物に移っていった。西塔・横川の鐘楼・赤山宮といった比較的小規模な建物や椿堂・山王院・不動堂といった塔の下部に所属する各谷の本堂建築である。

III期に造営された建物は比較的小規模であるため、II期建物が延暦寺全体の歴史的景観に与える影響は小さい。しかしその中でも西塔・横川の鐘楼は「延暦寺型鐘楼」ともいうべき、独特の意匠を示しており、注目に値する。なおIII期にも徳川幕府による御用作事は継続しており、主要建物の継続的な修理の基盤ができあがったのである。

IV期：近世的造営の終末期（19世紀～明治前期） 19世紀に入っても、新造は限定的で、維持管理が造営の中心であった。なかでも最も大規模なものは文化8年（1811）の修理で、四季講堂を筆頭として、横川の諸堂12棟、東塔の大講堂・伝教大師御廟、西塔の転法輪堂が修理された。

幕末から明治初頭には延暦寺も争乱・廃仏毀釈・社寺領の上知の影響を受け、新たな造営はなされなかった。維新後初の大規模な造営としては、坂本滋賀院の再興がある。明治10年（1877）に滋賀院は焼亡し、明治13年（1880）に山上の建物を移築した。この際に新造された勅使門の手法や意匠は近世を継承したものであった。近世的手法は明治期まで継続していたが、明治27年（1894）の無動寺谷明王堂の再建が、その終焉であった。

IV期は社会の混迷の影響を受け、修理・新造ともに活発な時期とは言い難い。廃仏毀釈の影響から脱却した時期には近代化の波を受け、近世的造営は終焉を迎えた。

